The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | トナカイに生きる人々 : 大興安嶺に住むエベンキ人のトナカイ飼育について |
| Author(s) | 思, 沁夫 |
| Citation | Arctic circle. 2004, 52, p. 4-9 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/25923 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集
人と動物のあいだ ②

# トナカイに生きる人々
## ―大興安嶺(中国)に住むエベンキ人のトナカイ飼育について―

思 沁夫（スチンフ）（金沢大学特別研究員）

### はじめに

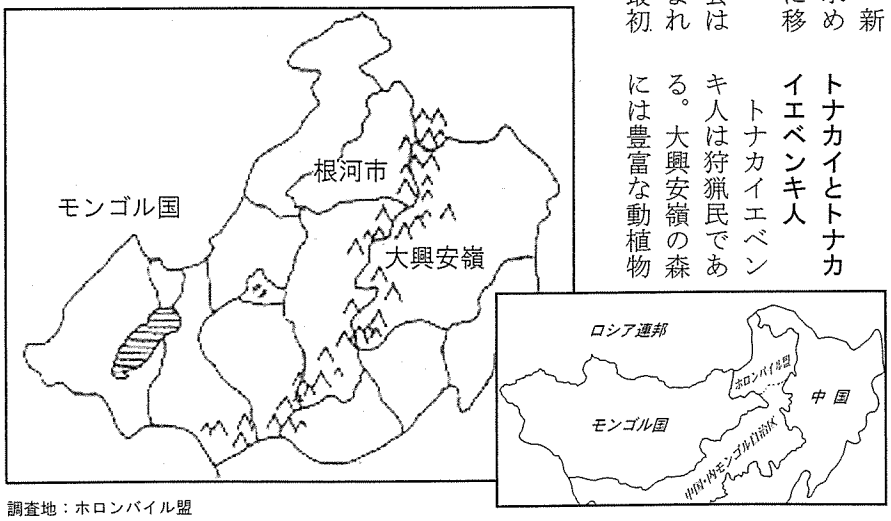
中国大興安嶺の北部森林地帯に暮らすエベンキ人（行政的には内モンゴル自治区・根河市・オルグヤ民族郷となる）は、中国では唯一トナカイを飼育している人々である。この二百人ぐらいの小さな集団は、十九世紀初頭、新しい猟場とトナカイの放牧地を求めて、ロシア側から中国の大興安嶺に移住した人々の子孫たちである。

一九四七年以降、エベンキ人社会は社会主義体制の中国国家に組み込まれる。一九五〇年代半ばに誕生した最初の民族郷（民族自治地方）から、約半世紀にわたって、エベンキ人社会は主流社会の影響を受けて大きな変貌（へんぼう）を見せている。例えば、定住化、ほかの民族との通婚、狩猟やトナカイ飼育から離れて町で生活する人々の増加やことば、生活面での漢化の浸透などである。しかし、エベンキ人社会の多様化が進む一方で、依然移動生活を送り、トナカイと一緒に暮らす人々がいる。

中国には約三万人のエベンキ人が住んでいる。その中で、トナカイエベンキ人（以下はこの名称で呼ぶことにする）の生業（トナカイ飼育）、ことば、生活習慣はほかの地域のエベンキ人と異なる点が多い。本文では、筆者が現地で見聞してきたことに基づいて、トナカイエベンキ人とトナカイとの深い関係と、近年の生活の変化を紹介したい。

### トナカイとトナカイエベンキ人

トナカイエベンキ人は狩猟民である。大興安嶺の森には豊富な動植物




調査地：ホロンバイル盟

民族郷の入り口のところに、民族の象徴であるトナカイの像が立っている。

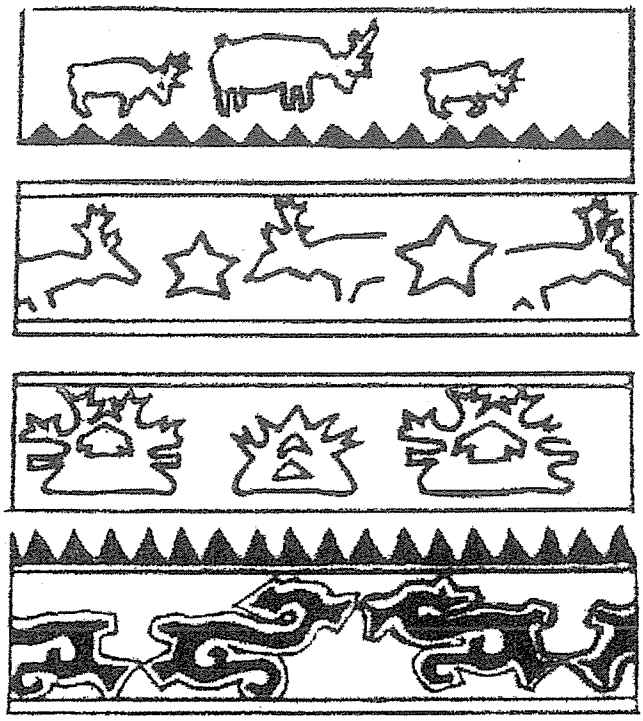
トナカイエベンキ人が生活する大興安嶺の森

が生存しており、そのうちトナカイエベンキ人が狩猟対象にしているのは、ヘラジカ、アカシカ、ノロシカや野鳥類などである。狩猟活動は基本的に動物の繁殖期、交尾期が終わった晩秋から早春にかけて行う。狩猟は男性が中心で、三～四人、あるいは五～六人から構成するグループで行うのが習慣になっているが、キャンプ地の周辺で、小型の動物を獲る場合は単独で行うことが多い。誰が獲った獲物だろうと、獲物はウリロン（四～五の世帯から構成する生活単位。同じ氏族に属する人たちが一緒に住むのが習慣である）メンバー全員に平等に分配しなければならない。トナカイエベンキ人社会には獲物の分配、消費だけではなく、狩猟活動に関しても、さまざまなルールや習慣がある。子供たちは大人から銃を撃つ技術を教わると同時に、動植物に関する大人の経験、知識を学ぶ必要があり、また昔からの習慣（たとえば妊娠中の動物は獲物にしてはいけないなど）を身につけなければならない。

トナカイエベンキ人が自分で言っているように「私たちは動物の肉を食べ、動物の毛皮で作った服を着る生活が大好きだが、もしトナカイがいなければ、この生活は成り立たないだろう」。トナカイエベンキ人にとって、トナカイはなくてはならない存在である。キャンプ地から何十キロメートルも離れている猟場から、一頭二百キログラム以上もある獲物（ヘラジカ）を人間だけの力ではキャンプ地まで運ぶことはできない。また、常に移動生活を送る彼らにとって、トナカイがいたからこそ生活用具や老人や子供を遠くまで移動させることが出来たといえる。さらに、トナカイの乳はトナカイエベンキ人にとって、重要な栄養源である。毎年五～十月にかけて、トナカイエベンキ人の女性はトナカイの乳を搾る。トナカイの乳は紅茶に入れて、ミルクティとして利用するのがもっともポピュラーである。一頭のトナカイから一日に出る乳の量はわずか（トナカイの栄養状態によって変動するが、大体二五〇～三百グラム程度）であるが、トナカイの乳は、野菜をほとんど摂食しない彼らにとって、ビタミンの補給に大変役に立っている。

トナカイの世話は基本的に女性がする。ロシアのエベンキ人の研究家（B・A・トゥゴルコフ）が指摘したように、トナカイは人間に多くの恵みを与えるが、代わりに人間から求めるものは一握りの塩だけである。とは言え、トナカイ飼育者にはそれなりの経験が必要である。トナカイはコケ類、木の若葉、新芽や草などを食べるが、大好物はエベンキ語で〝オンゴン〟と呼ばれているコケである。常にオンゴンが豊富な場所を見付けることができ、そこへトナカイを移動させることが飼育者には求められる。また、出産シーズンになれば、近くに深い河がなく（まだ泳ぐことができない子供トナカイが落ちて溺れて死ぬ危険がある）、風通しがいい場所を見付ける必要がある。

六月から九月上旬にかけて、森には大量の吸血性昆虫が繁殖する。蚊に刺されて、トナカイは餌を取るどころか、落ち着くことさえできない。この



トナカイはトナカイエベンキ人のデザイン（図によく登場する）。これらは白樺製品や毛皮製衣服によく施される、トナカイやトナカイ独特の角の形の模様である。

時期に限って、トナカイエベンキ人はトナカイのために、蚊が活発に活動する昼間に、キャンプ地の近くで火をたいて、大量の煙を発生させる。煙があるところにはこれらの吸血性昆虫が少ないので、トナカイをそこに集めてくる。

日本人の魚に関する語彙が非常に多くあるのと同じように、トナカイエベンキ人のトナカイに関することばも大変豊かである。ほぼすべてのトナカイが自分の名前を持っている。またトナカイの各部分には細かく名前が付けられている。さらに性（オス、メス）、年齢、角や毛の色によって呼び方が違ってくる。また、長年の経験からトナカイエベンキ人はトナカイが好む餌の種類、トナカイの病気や怪我に効く薬草なども熟知している。

トナカイエベンキ人とトナカイの深いつながりは、彼らの精神世界にも反映されている。トナカイエベンキ人の伝統的な世界観では、人間の肉体はこの世に残るが、魂は天国に行くか、もしくは地獄に落ちると解釈されている。彼らは、人間の魂自らが幸せな天国へ行くことはできず、神と人間をとりもつ使者であるトナカイが、人間の魂を天国まで運んでくれるのだと信じている。そのため、人間が死んだら、一頭のトナカイを屠殺（トナカイエベンキ人は肉食としてトナカイを利用しない）して埋葬する。またシャーマンが行う重要な儀式の時、白色のトナカイを屠殺し、儀式の神聖さを高める風習がある。さらに、トナカイはシャーマンの唱え、伝説、物語の重要なテーマであり、衣服のデザインから白樺の樹皮でできた生活用品の模様まで、彼らの美の世界を構成する最も重要な要素の一つである。

トナカイエベンキ人の最後のシャーマンと言われていたニューラ・シャーマン（一九九八年没）の唱えには、トナカイとトナカイエベンキ人の女性を歌った一節がある。

「足が速いエベンキ人の娘さんよ！早くトナカイを見て来い！山の谷で、川の傍で。樹林の隙間から、オロン（トナカイ）の角が光る。遠くからオロンの鳴き声と鈴の音が聞こえる。西へ東へ見てごらんよ、われわれのオロンは森中に…」。

**現金収入源となったトナカイ（鹿茸）**

従来トナカイエベンキ人の生業といえば狩猟である。しかし、一九五〇年代からスタートした国家による森林伐採（大興安嶺は中国の最大の木材供給地である）や林業職員による乱獲などで動物が激減したため、一九八〇年代以降、狩猟は生業として成り立たなくなってしまった。

一九六五年トナカイは集団化され、また民族郷の増収を図る目的から、地方政府はトナカイの鹿茸（袋角）を漢方薬の材料として商品化することを推進した。一九八四年地方政府の方針変

毎年の５月～10月にかけてトナカイの乳を搾る。
トナカイの乳はそのまま飲まず、紅茶に入れて飲む。

ハエ、カやブヨなどが大量に発生する夏、トナカイはいつも火（煙）のところに集まってくる。

トナカイエベンキ人（特に女性）は、トナカイに話しかけたり、あるいはただ名前を呼んだりして、トナカイと一緒にいるのが大好きである。

トナカイの親子

化によって、トナカイエベンキ人に個人によるトナカイの飼育と鹿茸を売って現金収入を得る機会が与えられた。二〇〇二年の時点で、二八世帯の人たちが五つのキャンプ地で、合計約六〇〇頭のトナカイを飼育し、生計を立てている。

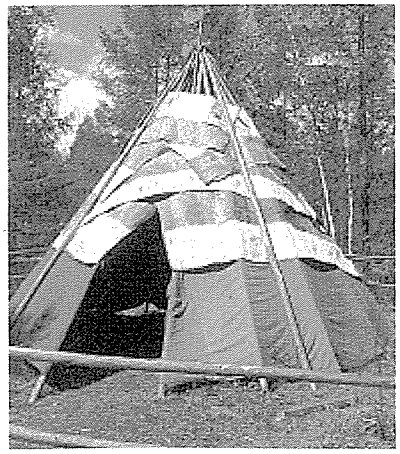
多くのシカ科動物がそうであるように、トナカイの角は冬に落ちて、翌春にまたはえてくる。シカ科動物は普通オスだけが角を持っているに対して、トナカイはオスもメスも角を持っている。角が出て骨化する前の段階を袋角といい、鹿茸とは袋角を切り取り、乾燥させて漢方薬の材料にしたものである。袋角を鋸(のこ)で切り取る作業は大体五月後半から七月にかけて行う。

## トナカイとともに生きる

近年、狩猟はほとんどしなくなった（正確にはできなくなった）とはいえ、キャンプでの生活は依然移動を繰り返す。もちろん、移動生活に変化がないわけではない。例えば、昔はトナカイに荷物を載せてキャンプ地を移動したが、いまでは自動車がトナカイの役割に取って代わった。また、民族郷には彼らの家があるため、民族郷とキャンプ地を往来しながら生活する人も少なくない。しかし、いろいろな変化の中で、トナカイに対する深い愛情、トナカイとともに生活する習慣は依然保たれている。ここで、二人の事例を通じて、その関係をもう少し具体的に見てみよう。

トナカイエベンキ人の最長老であるAさん（九〇歳？）は、長い時間キャンプ地を離れたこともなく、ずっとトナカイと一緒に暮らしてきた。二〇〇四年八月、私が彼女のキャンプ地で調査していた時のことであるが、ある日民族郷で生活している彼女の次女と二人の孫（彼女の長男の子供たち）が彼女を民族郷の老人ホームに入院させるため、キャンプ地にやってきた。彼女たちは一日かけて老人を説得したが、Aさんはそれに従わなかった。次女たちの説明通り、白内障によって目が不自由になったAさんにとって、さまざまな設備が整えてある老人ホームのほうが、冬になれば大変寒いテントより快適に過ごせるかもしれない。しかし、Aさんはオロンの鳴き声が聞こえない、森の新鮮な空気が吸えない生活は考えられないという。私がキャンプ地を離れる日、Aさんは来年またキャンプ地で会おうねと別れの挨拶をしてくれた。

Bさん（六四歳）は子供のころ民族郷の学校に通い、その後民族郷の病院で看護婦として働き、長い間トナカイ飼育から離れていた。しかし、一九八四年、彼女は病院の仕事を辞め、民族郷政府と三〇頭のトナカイを飼育する契約を結んだ。それからの彼女は、長



トナカイエベンキ人の住まい。夏は白樺の樹皮を、冬は毛皮を利用する。
しかし、最近このようなテントはキャンプ地であまり見かけなくなった。

Aさんにとってトナカイは家族のような存在である。

男と一緒に森でトナカイを飼育する生活を続けている。彼女と同じ民族郷での仕事を辞めてトナカイ飼育者になったトナカイエベンキ人はほかにもいる。

何年か前の調査で、私はBさんに、なぜ病院の仕事を辞めてトナカイ飼育の仕事を選んだかと聞いたことがある。その時Bさんはいろいろな事情があるとしか答えてくれなかった。二〇〇〇年の夏、私が彼女のキャンプ地で調査していた時に起きた出来事であるが、彼女の七才のメストナカイが林業職員が野生のシカを取るために仕掛けた罠にかかり、死んでしまった。私たちがそのトナカイを発見したとき、体温が残っていたため、死んでからまだ余り時間が経ってないと分かった。しかし、彼女はトナカイを一本の大きな木の下に埋葬した。私はトナカイの肉と皮は何千元（元は中国の貨幣単位）もするだろう、なぜ売らないのと聞いたら、彼女はこのトナカイのお祖母さんは、一九八四年私が政府（民族郷）とトナカイ飼育する契約を結んだ時、三才だった。翌春、彼女（トナカイ）は私が持っている一七頭のメスのトナカイの中で、一番先に一頭のとても元気な赤ちゃんを産んでくれた。それを見てトナカイ飼育に対する不安、苦労は全部消え、大変うれしかった。この家族はいつもメスばかりを産んでくれるので、そのお陰でトナカイの群れはすぐに大きくなった。私たちエベンキ人にとって、トナカイは家族のようなものだ、と売らない理由を説明してくれた。

## おわりに

トナカイを頼って生活している約八〇人のトナカイエベンキ人の生活水準は、現地の基準で考えてもかなり低く、トナカイの数が少ない人たちは政府の援助金なしでは生活ができない状態にある。また、トナカイの交通事故による死傷、人間（主に林業局員）が仕掛けた罠によって、足を折ったり、死亡したりして、トナカイ飼育を取り巻く環境も問題点が多い。さらに、若者のアルコール中毒問題やキャンプ地に行きたがらないなど、トナカイエベンキ人内部で抱えている難題も決して少なくない。

私は一九九六年からトナカイエベンキ人社会の変化を研究テーマにし、フィールド・ワークを続けている。なぜか森に囲まれたキャンプ地では、よく落ち着くのである。きっと何でもお金に換えてしまいがちな現代社会が失ったものがここにあるからだろう。

トナカイは中国エベンキ人のシンボルマークに指定されている。このおとなしく、優雅な動物が多くの人に愛されることを願いたい。特に、長い間トナカイエベンキ人と付き合ってきた私としては、若者たちが自分の「伝統文化」を守ってゆくことをこころから願いたい。